
特集：徳島の緩和ケア

若すぎる死, それを支えた家族と医療スタッフ

上 平 ゆかり

マスカット内科看護師

(平成17年4月28日受付)

(平成17年5月11日受理)

私は、何歳まで生きられるのか？あの日から幾度となく思うようになりました。

日本人の死亡原因のトップを占めるのが、悪性新生物（癌）と解っていても、他人事のように思い、身内から癌の人がいないことを願うのは誰しも同じと思います。

Tさんは、これまであまり病院へかかる事もなく、仕事に地域活動にと積極的に参加し、元気な日々を過ごしていました。1ヵ月位前より、体調の不良を訴え近院で内服治療を受けていましたが、症状が変わらず総合病院を受診し、検査の結果、膵臓癌で手術もできず余命3ヵ月と診断されました。セカンドオピニオンとして他医院の医師にも相談にのって頂きましたが、病状があまりにも悪化しており手術ができないとの事でした。39歳の若さで余命宣告される病気とは、本人・家族にとってやりきれない気持ちだったと思います。と同時に、脳裏に浮かんだのは痛み苦しみながら最期の時を迎える姿とそれを見守る家族の姿でした。

末期癌の殆どが痛みに悩まされ、痛みに耐える為、壁に爪跡を残した人もいと聞いたこともありました。私は、叔父、叔母に対して何も言葉はなかった話を聞くだけでした。人に話すことで少しでも気が安らぐなと思い頻繁に顔を見に行こうと思いましたが、かけてあげられる言葉が見つからず、自分の無力さ・知識の無さに情けなくなりました。

そう、あの時期は猛暑で、健康な者でも食欲が無くなったり、体調を崩しやすい夏でした。Tさんの病状を耳にしてからは、気分的にも落ち込む日々になりました。離れている私でさえこのような状態になるのに、家族は悲しみをこらえてのTさんの看病に対する苦労は計り知れないものがあったと思います。

家族は涙を流し、いとおしさと、言い知れぬ悔しさ・無念さが込み上げ、両親にしてみれば代わられるものなら

代わってあげたいと思っていたに違いありません。近院にかかっていたにもかかわらず、早期発見が無理であったにせよ、末期癌になるまで詳しい検査がされなかった事、させてやれなかった事が無念であり、言い尽くせぬ怒り・悲しみがあったと思います。

この頃からTさんも自分の病名について気づき始めていたと思います。

両親は、「気の弱い子だから最後まで病名を伏せておきたい。」と言いましたが、いろんな情報が簡単に得られる時代……！気づいた時に「どうしてもっと早く知らせてくれなかったのか」と本人が悔しむと思うので、私は、告知した方がいいとアドバイスしました。Tさんが信頼している主治医に告知してもらうことにし、話してもらいました。Tさんも主治医を信頼し身を預け積極的に治療を受け続けました。

そんな中、家族は神・仏、あらゆる病気の心身の助けになる事には時間を惜しまず、病氣回復を祈り駆けづり回っていました。

病室に足を運んだ時、ベッドサイドにはたくさんのお守りがあり、神も奉ってありました。般若心経を書きながら、「僕はここで、こうして神様を信じるしかないんだよ……。」と言い常に拝んでいました。

入院生活も1ヵ月が過ぎ、胆のうにチューブを入れ黄疸も軽減し一時的に退院の運びとなりました。久しぶりに自宅に帰り、家族とともに食事ができる喜び、何でもない普通のことなのに……。幸せがあふれていました。

しかし、一家団欒の日々がそう長くは続きませんでした。

体力が無く、自分の好きな仕事に打ち込むことはできなかったけれど、訪問してくれる人と楽しそうに話す姿を幾度となく目にしました。Tさんは、仕事の場に立ち好きな仕事ができないということは、とても悔しい思いだったでしょう。この思いは、人生の幕を下ろすまで変

わることはなかったと思います。

両親には、手術治療もできず退院したわが子が病院に見捨てられてしまったような感じに思え、何とも言い表せない悲しみが有り、病名発覚から余命を一日でも延ばしてやろうと、心身とも休まることができなかったと思います。

叔父は、こう言ったそうです。「わしはな、息子の病気を知った時一晩泣いた。しかしな、最期まで見送り、旅立たせるまでは涙は見せえへんと心に決めた。」と言い、気丈に戦っていました。そう、今思えば叔父や叔母の涙は一度も見なかったように思います。

医学的なことは、主治医に任せ、家族は治療を諦めず、知人から勧められた健康食品を調べTさんに服用させていました。最初は消極的でしたが、両親の勧めでアガリリスクや、鮫の軟骨の粉末、タヒボチャ等を服用していました。又、通信販売で癌に効くと言う高価な水も取り寄せ服用したり、丸山ワクチンについても情報を集めていました。

Tさんの生きる一番の支えは家族の愛でした。妻の笑顔、子どもの笑い声、両親からの暖かい眼差しがあったからこそ最後まで戦い抜けたと思います。それから、観音様にお仕えしておられる住職様の生きるんだ！治るんだ！の言葉にも随分助けられたと聞きました。

告知から3ヵ月が過ぎた頃、弱々しい体を奮い起こし家族で息子の運動会を見に来ている姿を見かけ、私が「調子どう？」と声をかけると「僕は、本当はもう死んでなかったらあかんのになぁ……。」と言い、一日一日を大切に何かを確かめるかのように、生きている姿が愛おしく今にも溢れ出しそうなあつい気持ちを抑えるのがやっとでした。

発病から8ヵ月が過ぎた頃、食事ができなくなり吐血と痛みが現れるようになり、再入院したと耳にしました。

ある日、病室を訪れ車イスで放射線治療を終え帰ったところと言う姿を見て、顔色は悪く、手足はやせ衰え、お腹がポッコリと膨らみベッドに移るのにも支えが必要で、常に点滴と共に行動しているTさんを見ると言葉を失い、うつむいていると、そんな私は「頑張るけん。一日でも長く生きられるよう頑張るわな。」と逆に励まされた気持ちになりました。

発病の頃より新聞にK病院の緩和ケア病棟のことが連載されているのを見つけ、末期の人への取り組みについて、知るようになりました。新聞の切り抜きを両親に

渡し、K病院にホスピスがあることを伝え、お世話になったらどうか話をしていました。両親は「まだ早すぎる。今、入院させるのは可哀想だ」と言っていました。

しかし、日々冷たい床に布団を敷き、狭いスペースで寝泊まりするTさんの奥さんも大変だし、個室にいてもドアの開閉の音や廊下の足音が気になり、痛みに対する肉体的苦痛、精神的いらだち、死を意識しての恐怖・不安など、強いストレスも発生しました。Tさんもホスピスに転院して頑張りたいとの思いで、K病院への転院希望しました。

そこで新たな現実が飛び込んできました。そうです、ベッドの空きが無く、順番待ちとの事です。一方、総合病院では「いつ頃、転院できますか？」と急がされ、「一時退院して順番がくるまで、個人病院へ移ってはどうか？」と言われ苦しい思いをしていたようです。

私も気になり、いてもたってもいられず直接、K病院緩和ケア病棟へ電話をしたところ、「いつ空くかということは、はっきりお答えできないんです。」と言う返事で、それもよく解ります。本人が希望する以上、一日でも早く転院させてあげたいという気持ちで一杯でしたが、そのすぐ後の言葉で救われました。「順番で行くと次です。」と言う返事が返ってきたのです。

K病院へ転院し、私は数日後に足を運びました。3階のホスピス病棟は静かで、病室には患者の名前でなく花の名前が書かれていました。

「あ・や・め」ここがTさんの部屋でした。

とても病院とは思えない、さながらワンルームマンションの雰囲気でした。病室も明るく、家族だけの時間が過ごせる配慮がなされ付き添われていた奥さんもゆったりしたソファでくつろぎ、ミシンで何か縫い物をしていました。

私が、「えっミシン？」って聞くと、「ここでは、何をしてもいいんですよ。家にいる時と同じように過ごせるんですよ」と笑顔で話してくれました。さすがにミシンは……、「ミシンは自前よっ」と冗談もでていました。

冷たい床に布団を敷き寝泊まりしていたのとは違い、部屋に定期的に看護師が入ってくるのでなく、カーテンが開いていると顔を見に来て頂いたり、持続点滴もロックをしてはずして頂き、短時間ではあるけれど、つながれた感じから開放させて頂けるようです。

点滴にもキルティングで縫われた袋がかぶせられ、気配りが見受けられました。ベッドサイドに手すりの付い

たトイレ，洗面台があり介助するほうも楽だと思います。廊下には，ファミリーキッチンがあり，食事の温め直しや簡単な調理ができるようでした。

痛みが増せば薬の量を増やし，よく眠るようであれば量を減らしてもらい，私が想像していた癌末期の苦痛な表情は見られませんでした。

10日間の入院生活の中で，総合病院では経験できなかった入浴が3回もできたこと。車イスで散歩に行けたこと。その他……。K病院ホスピスにとっても感謝していました。

ベッドに横になると，すぐうとうとし夢を見ているようで徐々に眠る時間が長くなり，呼吸も弱々しく，危篤状態になってからは，病院に用意された広々した親族用の控え室で，家族や親戚が寝泊まりでき，安らかな最期を見取り，迎えられることができました。ある歌のフレーズに「あなたに会えてほんとによかった」というのがあります。Tさんと家族もそんな気持ちで，K病院での入院生活を送れたのではないのでしょうか。

短い期間でしたが，TさんはK病院でお世話になり，家族，大勢の親族に見守られ，人生40年，平均寿命の半

分に幕を引きました。

癌末期の患者さんは，医師から見離されたように思い，身体症状に加え，不安や孤独，絶望，いらだちなどの心理的・精神的症状など多種多様な苦痛・苦悩を伴うことが多いと思いますが残された時間が限られ，この貴重な時間の過ごし方は本人にしか決められません。

今回の経験を通して，一人でも多くの方が心安らかに最期の時を迎えられるように民間病院での緩和ケア病棟の充実の必要性を痛感しています。

みんな，みんな頑張りました。Tさんも命ぎりぎりまで精一杯生き抜けたのは緩和ケアの活動があり，K病院にホスピスがあったからだと思います。

最後に，執筆の機会を与えて下さいました関係各位の方々に心から感謝申し上げます。

一看護師，一病院のスタッフとして，またひとりの人として生きる，生き抜くという気持ちを再認識させて頂き……。

本当にありがとうございました。

Tさん，私は，何歳まで生き抜けるのでしょうか……。